

檀信徒の皆さまへ

四月二十八日は七百六十五回目の立宗宣言の日
《大聖人様の八百歳のお誕生を、八十万人以上の法華講衆でお祝い申し上げます》

四月二日の広布唱題会で拝読した御書です。いま少し詳しく拝します。

『妙密上人御消息』建治二年閏三月五日 五五歳 御書九六七頁

今、日蓮は然らず。已今当の經文を深くまぼり、一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも勧む。麻の中の蓬、墨うてる木の自体は正直ならざれども、自然に直ぐなるが如し。經のまゝに唱ふればまがれる心なし。当に知るべし、仏の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へがたきか。

当抄は今から七四一年前の、建治二年（一二七六年）閏三月五日に身延から鎌倉の桑ヶ谷に住んでいた妙密上人に与えたものです。

「今、日蓮は然らず」と述べられますのは、大聖人様以前にも法華經を読む者は大勢いたが、それらは我意我見からの誤った読み方だった。今の日蓮はその者たちとは違い、法華經の教えを深く守り、法華經の肝心である南無妙法蓮華經の題目を、自ら唱えるばかりではなく人にも勧めている。だから同じ法華經を読んでいても全く違うものである、という意です。

そして、法華經に説かれるように南無妙法蓮華經とお題目を唱えれば、心が曲がることはない。麻畑の中に生える蓬が真っ直ぐに育つように、まがった木も墨で線を引かれた通りに製材をすれば真っ直ぐになるのと同じである、とお題目を唱える功德を示されます。そして、お題目を唱えることができるのは、仏の御心が私たちの身に入っているからだと言われます。

以下に少し詳しく述べます。

大聖人様以前に法華經を読んでいた者たちは、例えば中国の慈恩や嘉祥等を挙げることができます。この者たちは法華經を讃えておりましたが、その読み方はあくまでも自己流でした。当然功德などありません。その信仰姿勢を伝教大師は、「法華經を讃えるといっても、かえって法華經の教えを死（ころ）すものである」と厳しく破折されております。

私たちの立場では「日蓮大聖人様の教えを讃えるといっても、かえって日蓮

大聖人様の教えを死す」ことにならないように、留意しなければなりません。朝夕勤行をし御書を拝読していても、自己流の信仰であっては功德は受けられません。それどころか、慈恩や嘉祥のように謗法の者となるのです。

大聖人様御在世の当時の民衆は、念仏や真言などの諸宗の教えに随い、阿弥陀仏や大日如来を本尊として拝んでおりました。このような信仰を大聖人は徹底して破折され、すべての人々を救う功德のある、本門戒壇の大御本尊様を弘安二年十月十二日に建立されました。この大御本尊様に帰依する以外には真実の幸せを得ることはできません。この道を外れることが「大聖人様の教えを死す」ことです。今の創価学会がそれです。他山の石としてまいりましょう。

「已今当の經文を深くまぼり」と述べられるのは、法華經の法師品第十の文を略して引用されたものです。そこには「我が所説の經典、無量千万億にして已(すで)に説き、今(いま)説き、当(まさ)に説かん。而(しか)も其の中に於いて、此の法華經、最も為(こ)れ難信難解(なんしんなんげ)なり」と説かれます。意味は、「私(釈尊)が説く教典は、已に説いたもの、今説いているもの、これから説くものがあるが、それらの教えは信じることも理解することも簡単であるが、法華經は信じることも理解することも難しい教えなのである」というものです。

已に説く = 法華經が説かれる前に説かれた教えがここに入ります。阿弥陀經や大日經等が含まれます。

今説く = 法華經の開經である無量義經をいいます。法華經と同じところで説かれたもので、これから真実の教えである法華經を説きます、とその中で釈尊は述べられます。

当に説く = これから説きます、との意味で、法華經が説かれた後の涅槃經をいいます。この教えは、法華經の中で漏れた人々を導くために説かれたもので、落ち穂拾いの教え、とされます。ですから最後に説かれたからと言っても、あくまでも法華經の補助的な經文であることを忘れてはなりません。

私たちの信心でこの御文を拝するならば、

法華經(日蓮大聖人様の教え)はあらゆる教えを超過した最高の教えである。

最高の教えだから信ずることも理解することも難しいのである。

難しいことに挑戦するのだから、喜びも大きい。

ということが理解できます。

そして、法華經の文の底に秘し沈められた「南無妙法蓮華經」を私たちに説き明かされて、幸せになる道を開いて下さったのです。

さらに仰せになります。

「仏の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へがたきか」

と。

誠に有り難いお言葉ではありませんか。大聖人様の仰せの通りにお題目を唱えることができる私たちの身は、仏の弟子であり仏の子供である、と大聖人様が仰せ下さっているのです。

この自覚を持つことができる人は幸せになります。信じて疑わずに、「仏の弟子、仏の子供」との自覚を新たに、苦難の中にあろうとも心を励まして乗り切ってまいりましょう。

桜が咲き、花水木もまもなくです。草木の生命力に負けないように、私たちの命の中にある、「成仏・幸せ」の大きな華を咲かせましょう。